
僕と死神

建上煉真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と死神

【Nコード】

N7931L

【作者名】

建上煉真

【あらすじ】

『朝起きたら枕元に死神がいた』

マイペースな男子高校生である主人公と、これまたマイペースな死神の少女を中心とした現代妖怪ファンタジーミステリーという良く分からない路線をぶっちぎる小説となっております。

1章：死神：——TYPE？——

朝起きたら枕元に死神がいた。

今日は何日だっただろうか？

そっだ、9月20日月曜日。

時計を見る。6：45。

時間が無い。急いで学校を行かなくては。

「ちょ、ちよつと！！ 私を無視しないで！！」

と寝ている僕を上からある人物が覗き込んで、怒鳴った。

その人物は少女で、白い髪に黒い服、巨大な鎌を片手に持ち、傍らには黒猫がいた。

……まあ、世間一般でよく聞く『死神』の格好だった。

しかし、おかしい。

世間一般的の『死神』と言ったって、そんなものはオカルトだ。他人に話したら鼻で笑われるような、そんな存在。

「ちよつと。だから無視しないで！！ お願いだから」

死神は未だに怒鳴っていた。

僕はゆるりと立ち上がり、キッチンへ。

「あ、あの？ ちよつと？」

と言う声が聞こえるが気にしない。

僕はポットからお湯を出し、急須からお茶を湯飲みに入れる。

「とりあえずお茶でもどうぞ」

と死神に湯飲みを渡す。

「あ、どうも」

と死神は湯飲みを受け取った。

死神がお茶を飲んでゐる隙に早々と着替える。

早くしないと学校に遅れる。

5分もしないうちに着替え終わった。

カバンを持ち、玄関から家を出る。

「じゃ、僕は学校へ行くんで、カギはポストに入れといてください」
玄関を出る。

後ろから、『え？ あ、あの？ ちょっと？』と聞こえたが気にせず走る。

さらに、ガシャンと言う何かが落ちた音。
気にしない。

1章：死神：——TYPE？——

学校を着くと、さっきの死神について思考していた。

僕がさっきの少女が『死神』と言って現れたのに驚かなかったのは、内心それを望んでいたからかもしれない。

将来に何も見出せず、ただ同じ日常を繰り返すだけ——
別に死にたいわけじゃない。

ただ同じ毎日退屈だ。

いつからだろう、こんなに日常がつまらなくなったのは。

高校生になってから？

中学生になってから？

それとも、あの事件以降からだろうか？

たぶん、あの事件なんだろう。やっぱり。

あの日以来僕はただのしゃべるだけの人形と化してしまったのか
もしれない。

もし誰かが止まる事を許してくれるなら——

そんな思いが彼女を呼んだのかもしれない。

1章：死神：——TYPE？——

僕は一時限目以降、授業を受ける気にならず、屋上で時間つぶしにやってきた。

屋上に来たのはたまたまだ。

しかし、僕は心の奥底では知っていたのかもしれない。

『彼女がそこに居る』と。

案の定、死神は屋上で仁王立ちをしながら、唯一の屋上扉を睨んでいた。

死神は僕を見つけると、近づいてきて僕の前でとまる。

「調べました。色々な事を」

何を調べたと言うのだろうか。

何を今更、僕は知っているはずだ。どうせあの事件の事だろう。

僕は立っていらなくなったので、そのままコンクリートの屋上に座った。

「気にする事じゃありません。妹さんの死は貴方のせいじゃありません」

やっぱり、それか。

「どうでもいいさ。…もう」

「……そうですね」

この時は驚いた。

てっきり、定番の慰めでも言うのかと思った。

「もう過ぎた事はどうしようもありません。問題は貴方がこれからどうするのか？　と言うことです」

僕は死ぬのか。

「そうですね。このまま何もせずに流されるまま生きているのでは、死んでいるのとは何も変わりません」

僕が何もしなくなつたのはあの事件からだ。

僕は妹が死なないように必死になつた。

しかし、神はそんな僕をあざ笑うかのように妹を連れ去つた。

その時思つたんだ。

『どうせこうなるのなら、何もしない方が良いんじゃないか』と。
しかし、死神は首をゆるゆると振つた。

「たとえ至る結論が同じであつたとしても、何か行動を起こすだけで、それだけで少しでも楽になれる人はいるんですよ」

僕は顔を上げた。

死神は死神らしくない顔、まるで聖母のような微笑で僕を見下ろす。

「貴方は妹さんのために一生懸命に頑張つたのでしょ？　だつたら、妹さんは嬉しかったはずですよ」

肩の荷が下りた感じだつた。

救われた感じがした。

誰にも言われた事の無い言葉。

誰にもかけられた事の無い笑み。

僕は気づいたら泣いていた。

別に泣きたかつたわけじゃない。

気づいたら、涙を流していた。

「私が、今度は貴方の支えになりましょう」

僕と死神は××をした。

1章：死神：——TYPE？——

「貴方の命を貰うまでは帰れません。ですからここで一緒に生活させてもらいます」

と死神は頬を染めて言った。

「あ、ところで夕食はまだですか？」

と死神は方向を強引に曲げた——わけでも無さそうだがさつきから腹をぐきゅると鳴らしているから。

僕はその行動がかわいらしく見えて、死神の頭を撫でた。

「や、撫でないでください」

と恥ずかしそうに答える姿も、またかわいらしい。

「とりあえず、お茶でもどうぞ」

と僕はポットからお湯を出し、急須からお茶を湯飲みに出して、渡す。

「うー……。あ、どうも」

と死神は頭を抑えながら、湯飲みを受け取った。

「朝も思いましたけど、このお茶おいしいですねえ」

と死神は笑みをこぼした。

——まだ僕は動いている。

理由はどうであれ、それで良いと言う事なんだろうか？
死と隣り合わせの生活。

——少し明日が楽しみになってきた。

END——

——第1章

2章：吸血鬼：——TYPE？——

まずは生きる上で“死”と言う概念を学ぼう。

古来から、王の課題^{タスク}として不老不死を目指すのが、もはや当然のモノとなっている。

古い中国神話では、人知れず生きる、高い山頂に住んでいる仙人が不老不死の薬を持っている話や、欧米などの吸血鬼伝説などは、最早当たり前の誰もが知っている神話伝説となっている。

しかし、皆様はご存知だろうか？

元来、人間と言う生物はどんなに頑張ろうとも精々120〜130歳までしか生きられないのだ。

それは、どんな時代、種族であろうともだ。

元々、人間の細胞の中には自殺因子や発ガン性物質などがあり、そんなに長くまで生きて生ける様にはなっていない。

そして、それらは産まれたばかりの子供にですら、その身体の細胞の中に含んでいる。

つまりは、人間は産まれてすぐに“死”と言う概念を体の中に孕んでいるのだ。

生と死は表裏一体。

産まれた瞬間から死は決定している。

しかし、我々は常にこれを意識して生きているのだろうか？

答えはNO。

身体の弱い人やご老人は別として、人間としての全盛期の10代〜20代の人がこれを意識しているのは、多くて1割弱だろう。

しかも、その人物は特殊なケースが多い。

身近な人が死んだと言う事になるからだ。

家族、親戚、友人、恋人。

それらのケースと親密に関係している。

では、貴方はどうだろうか？

貴方は“死”をどう思っている？――

2章：吸血鬼：——TYPE？——

+

僕は「ふう」と一息つき、今まで読んでいた本を本棚に戻す。

そして、他に何か良い本はないかと、ぐるりと見渡す。

ここは、僕の通う学校からやや座標を南側に移した、駅前の大きな古本屋だ。学校に近いこともあり、今のような下校時間と重なり、多くの中高生が訪れる。

とくにめばしい本も見つからなかったため、本屋を出てすぐ近く的大型スーパーに入る。僕は今、独り暮らしをしているため、すべて自炊しなくてはならず、しかもここ最近、居候も出来たため自分の食費を気にしながらの買い物だった。

今日の夕飯は何か良いだろうか？ チキンカツなどが良いかもしれない。と思考しながらも、頭の隅っこで別のことを考えていた。何てことはない。さっきの本の内容だ。

さっきの本にも書いてあった通り、“死”と言うものは常に身の回りにあるものだ。例えば、今すぐにこのスーパーがテロにでもあれば、僕は今すぐに死ねるだろう。

いや、別にそんな大げさなものじゃなくても良い。床を滑って、思いつきり頭を打ち付ければ、すぐに極楽浄土行き決定だ。

しかし、それは当分ないだろう。

何故かって？

それはあの本には書いてないことだし、僕も信じていなかった者が居たからだ。

その答えは今、僕のアパートに居候と化している少女の事だった。彼女は“死神”だと言う――

2章：吸血鬼：——TYPE？——

さて、体よく買った夕飯の入ったビニール袋を両手に提げ、僕はスーパーから東に位置する、自分のアパートへ向かっている。それなりに古く部屋も広く無いが、トイレ・風呂付きでそこそこ安ければ、どうでも良かった。

僕は家を出たかったのだ。

だから、高校も実家から遠いところを選び、一人暮らしをしたいと叔父と叔母に告げた。叔父と叔母は勿論反対したが、高校を合格してからそれを言ったので、しぶしぶ了承を得ることが出来た。

一人暮らしをしたかったのは唯一つ、実家に居なくなかった。

どうしても、妹の事を思い出してしまうから。

だから、早々と一人暮らしを始めた。

しかし、あの死神少女は結構食べる。最初、この世界の食べ物普通に食べられる事を知って、結構驚いたものだ。

……まあ、食べる量と食費にも結構驚いたけれど。

お金に関して言えば、一応、月の仕送りもあるし、いざとなればバイトをしても良いと考えている。

生きる難しさに比べれば、どうって事はない。

昔は死にたかったけど。

だけど、今は死にたいとは思わなくなった。

それは、確実に彼女のお陰だろう。

そんなこんな思考していたら、アパートの前についていた。

さて、腹をすかしている死神お嬢様に早く夕飯を作ってあげよう。そう決意し、カンカンと音が鳴る階段を上がる。アパートの前に立つて、鍵を開ける。

簡単ながちゃりと言う音。古いアパートだから簡単な鍵のみの防犯対策しか無いが、まあ盗まれる物なんか無いし、それに留守番をしている居候がいるから心配ない。

……他の人からは見えないけど。

それで前、散々な目にあつた。

まあ、それは置いといて。

ドアノブを捻り、部屋へ入る。

そして、

「おかえりなさい」

と言う盛大な声と共に、どたと走りながら、その死神少女が現れた。黒いワンピースに白いショートカットの髪、肌は白いうよりも、全体的に色素が薄い感じ。身長は精々130cmぐらいで、どう見ても小学校中学年から高学年程度にしか見えない。顔もそれに比例して童顔。どっからどう見ても小学生にしか思えない。しかし、これでも数百年生きる“死神”だと言う。

「ねえねえ、ご飯買って来た？」

とその死神少女は近づいてくる。

僕は、「うん」と答え、ビニール袋を玄関に置く。

死神少女はビニール袋を漁りながら、

「今日の晩御飯は何かな」

と嬉しそうに歌っていた。

まったく、のきななものだ。お前の食費だけでどんなだけ、金が翼を生やし、飛んでいくか教えたいものだ。

「お、チキンカツだ。えっと…それに、から揚げか。楽しみ」

まあ、昔は飯のことでこんだけ、幸せそうな顔をする者がいたとは知らなかった。

sonだけ、彼女の事を知ったのかもしれない。

「ねえねえ、早く作ってよ！」

と言う声で僕は覚醒した。

「うん。分かった。ところで、ちゃんと言った仕事やって置いたか？」

あんまり期待して無いが、簡単な家事の仕事ぐらいやらせないと、食費をただただ消費する怠け者になってしまう。

「えっ！！ えっと……。あはははは……」

やってないのかよ。

やってないのかよ！！

「はあ……。いつも言っているけどな、ただでさえ居候の身なのに、さらに食費がかさむんだから、洗濯や皿洗いぐらいやってくれないよ……」

僕はため息を吐きつつ、この子に何を言ってもダメなのかと思い始めた。

「で、でもでも」

「でもじゃねえ」

僕はすかさず突っ込む。

死神相手に突っ込むのは僕が始めてかもしれない。

僕と死神少女との喧騒で起きたのか、彼女のペットの黒猫がのそりと立ち上がった。

「何をギヤアギヤア騒いでるんだよお」

と喋りながら四速歩行で歩いてくる。

あくまで言うておくが、普通の猫は喋らない。

そこが死神のペット。と言うことか？

「おれはペットじゃねえ」と言うが、可愛い黒子猫が悪ぶつてもなんともない。

僕が喋る不思議猫と会話していると、横から

「ねえねえ、聞いてよお。クロお」と、死神少女が割り込んできた。

しかし、黒猫に『クロ』って安直過ぎるのではないか？

まあ、『エリザベス』とか『ゴンザレス』とかあまりにも凝り過ぎていて名前もどうかと思うけど。

「なんだよお、マシロお」とクロは言った。

そう、この死神少女の正式本名は、白神しろがみ 真白ましろと言う。

なんとまあ、『白』と言う漢字が多い名前だろうと思った。

というか、死神に普通の日本人名が付いている事にもビックリし

た。

まあ、似合うと言えばそうなのだろうが。

イメージカラーが『白』だと思うから。

さて、そんな事は置いて。

僕は夕飯の支度をしにキッチンへ行く。

黒いエプロンをつけて、手を洗う。

「おい。マシロも手を洗って、皿を出しといてくれよ」

と夕飯の準備をしながら言った。

マシロは、「はいはい」と元氣良く答えた。

いつもそんな感じで手伝ってくれたらどんなに助かるか……。

「ねえ、ふゆくん。この皿はここでいいのかな？」

ああ。そこでいいよ。

と、答えるつもりで気づいた。

「ふゆくんってなに？」

すると、マシロから、

「えー、あだ名だよー。私はこれからふゆくんって呼ぶから。よろしくね」

っじゃない！ どんな仲の良い友人（男女とわず）そんなあだ名で呼ばれた事はない。よくて『冬^{ふゆ}』だ。まあ、ほとんどのクラスメートは、こんな呼び方をするのだが。

「えーいいじゃん。ふゆくん。かわいくて」

かわいくて。じゃない！ 貴方は死神じゃなかったのですか？

趣旨変更ですか？ それとも元々がこうなのですか？

僕はいいい加減悩むのに疲れてきたので、もう『ふゆくん』で良い事にした。どうせ誰も見ないし、聞きもしないからな。そしてよく考えれば、『冬』と言うあだ名で君をつけたら『ふゆくん』になるの、そもそも怒る必要性が無いことに気づく。なんだ。いつもクラスメートが読んでいる呼称とあんま変わらないじゃないか。つつーか、そのまんま。僕はいつもクラスメートに『冬』と呼び捨てにされるので気づかなかった。って言うか、そもそもそんなに僕

は友達はいない。話しかけてくれるクラスメートも少ない。

……。何だろうか。僕は軽くイジメにでもあっているのだろうか。

だんだん、僕がおかしいヤツに見られるんじゃないかと言うほど、混乱してきたところで、思考を一旦排除。食事支度を始める。

作り始めてから数分後、丁度あり合せのサラダを作るために包丁で野菜を切っていた時の事、僕はそう言えばずっとマシロを振り返って言った。

「僕の学校でちょっとおかしい事が起きてんだ」

「おかしい事？」

マシロは簡素で本当に何も無い中、ポツンと鎮座しているTVを見ていたが、僕の言葉に興味を持ったのか、くるりと振り返って、興味津々とでも言いいたげな瞳をした。毎日毎日家の中に引き籠もっているこの居候は同じことの繰り返しに飽きてでもいたんだろう。

「ああ。事のきっかけはだなあ——」

2章：吸血鬼：——TYPE？——

事のきっかけは僕が昨日、学校から帰るときだった。
ちよつと時間を巻き戻して語ろう。

教室の窓から入ってくる緋色の夕焼けは教卓の黒板を緋色に染め、
無人の教室を一層と寂しくさせる。

現在時刻は六時ぴつたり。夏が終わり、冬が訪れる準備期間としての、曆上秋と呼ばれる今の季節は、夏休みに浮かれた学生達を日常に戻すための期間としている。

そのため、秋と言う季節だけで悲しくなったり、虚しくなったりする人間がいる。

しかし、憤慨しているヤツなんて物はいない筈だ。

僕の目の前にいるヤツ以外。

「あー、ムカツク！ 何で何で何で！？ どーしてあんなヤツの事を！！」

五月蠅い。
めんどくさい

僕は読んでいた本を閉じて目前にいる彼女に言った。

「しょうがないんじゃないか？」

「しょーがないって何よ！ しょーがないって！！」

そう言つて、目の前にいる女——秋月あきつき 愛澄あいす——は教卓を蹴り始めた。

「物に当たるなよ。壊れる」

「良いのよ。壊れたら壊れたで知らん振りすれば良いんだから」
んなめちゃくちゃな。

そう思いながら僕は愛澄の顔を見た。

愛澄は、窓から入ってくる夕焼けの緋色に染まり、赤くなっている。

まあ、夕焼けだけで赤くなっているわけじゃないんだろうけど。顔の造形はそこそ良い。スタイルもそこら辺の女性には負けないのだが、いかんせん性格が悪いので、誰も近寄ろうとはしない。僕以外は。

「彼女の事なんだし。本人に任せるしかないと思うけどね」

僕は愛澄の逆鱗に触れないように注意しながら、早々と話を終わる方向に持っていく。

「その本人があのでいたらくだから困ってんのよ!!」

しかし、一向も意味を持たなかった。

「しかしだなあ——」

「しかしじゃない!!」

しかも徐々にヒートアップしてるし。

「大体、先生も先生よ! 桜雪さくらゆきを誑たぶらかしたりして!!」

そしてまた教卓をへこみそうな勢いで蹴り続ける。

僕は思わずため息をついた。

今までの話を簡単に要約すると、愛澄の友人、芹沢桜雪せつざくらゆきは美術教師、大河内明おほいけあきひろに愛焦あいしゅうがれているようだ。

明快明快。単純明快。これ以上分かりやすい話は無い。

しかし、単純明快ゆえに、非常にマズイ部分もあったりする。つまり、教師と生徒が一線を越えてしまったわけだ。

大河内先生はまだ二十代だし、顔、ルックスも問題が無い。

それに、美術教員と言うだけでモテたりするしな。

「いつかバれるんだからあ!!」

「まあ、そうだろうなあ」

僕は気のない返事を返しながら、椅子から立ち上がり、窓辺に立った。

窓を開けると、校庭から、下校する生徒達の声が響いてくる。

「バレたら、どっちも学校にはいられなくなるんだよ?」

「まあ、いられなくなるだろうな」

薄紅色に彩られた校舎と、綺麗に並んだ、緋色の夕焼けを映す窓と、時折聞こえてくる生徒達の声。

このどこにでもある放課後の風景の中に、どこにでもあるかどうかは分からない関係が、潜んでいる。

「真面目に聞けー！」

「んだよ…そんな事言ったって、僕にどうしろって言っただ。言うなら本人達に言え」

「ほ、本人に……」

愛澄はその情景を想像したのか、絶句しながらうなだれていた。

「ま、第三者が言う事じゃないと思うよ。僕は」

教師、生徒、浮気、不倫、結婚、離婚、片思い、両思い、本人達、第三者、三角関係、四角関係、禁忌、強姦、近親相姦、いけない関係、危ない関係、美しい愛、騙し騙され、その他、何だろうがやりたい奴等が勝手にやれば良い。どうなるうとそれは本人達の責任で、本当の意味での“第三者”の僕たちがどう言う物じゃない。ましてや、高校生、教師にもなって将来の事が分からなかったり、刹那的快樂に身をゆだねるなんて、ただの馬鹿じゃないかと思う。

「言うわよ！ 私は桜雪の友達なんだからー！」

気の強そうな顔をさらに強めにして、肩で切りそろえられたボブカットを揺らしつつ、叫んだ。

僕の主観では“第三者”に友達も含んでいたが、愛澄はどうなのだろうか？

まあ、素晴らしきかな友人関係って事で。

「……うん。ちょっと行って来る」

「うん？ 行って来るって、何処に？」

「決まってるでしょ！ 美術室よー！」

僕は時計を見る。さっきと時間が変わらない。六時十五分。完全下校時刻が七時だからまだ十分に時間はある。

「いや、ちょっと待て。行かないほうが良いぞ。色々な意味でマズ

イ。……まあ、そう言う状況を見たいんなら別だけどな」

愛澄は最初、僕が何言っているか分からないような顔だったが、段々と理解したのか気まずそうな、悔しそうな顔をした。

「——っ帰る！！」

愛澄は怒ってんだか、照れてるんだかよく分からない顔をして、机から自分の生徒鞆をひったくって、教室から出て行った。

「相変わらず、猪突猛進と言うか何と言うか。いや、良いヤツなんだけどな」

僕は愛澄が出て行って、さらに一層寂しくなった教室で一人つぶやく。

僕は教室の窓から見える特別塔を見る。

いや、さらに詳しくは二階のある窓。

そこがこの学校の美術室だった。

大川内先生はこの学校にも来たばかりで、僕としてはそんなに親しくしているわけじゃない。しかし特段嫌な先生と言うわけでもなさそうだし、女癖が悪いと言う噂も聞いたことが無い。だから僕的にはそんな危機感は無かった。

愛澄の思い過ごし、あるいは過剰保護みたいな心情と言うのが正直だ。

芹沢桜雪に関してはまったく持って知らない。

いや、愛澄からは名前ぐらいは聞いたことがあるので、全然とはいえないのかもしれない。

しかし、名前、クラス、部活動ぐらいしか聞いていないので、それ以上のデータは無い。噂にも聞かない子なので、それほど目立つ人柄でもないのだろう。

美術室の窓をガン見してもしょうがないので、窓から離れ自分の机に向かう。机の上に乗せている学生鞆を取って、下駄箱へ向かった。

2章：吸血鬼：——TYPE？——

ほんのりと暖かく室内を照らす夕日が、机に、黒板に、デッサンの石像に、柔らかな鴉色を投げかけて、黒い影を長く伸ばしていた。

人のぬくもりそのものを思わせる紅色のベールが、ロッカーにもたれて窓の外を眺めている明の頬おほほに触れ、揺れている。

その様子を静かに見つめていた桜雪さくらは、ゆっくりと、明に身を寄せて囁いた。

「先生」

長く、黒い、キューティクル自身が煌いているかのような艶やかな髪が肩から落ちて、明のスーツにかかる。桜雪の髪の毛は見る者を魅了する不思議な魔力があるような気がした。

わずかに眉をひそめる明の瞳を、まっすぐに見つめて。

「私を、愛してくれる？」

そう笑う桜雪の顔は、冷淡な表情。薄っすらと笑っているその顔は、まるで初めから作られている人形のような微笑だった。

明は背中に冷たい物が走るのを感じる。

「ああ……。もちろん……」

そう言う明の顔は無表情と言っても過言ではない。人形のように微笑むシヨウジヨと仮面のように無表情のセイネン。それは特異な空間だった。

今から一ヶ月前。ある夏休みの夕暮れの美術室で、桜雪の要求に応えるように、明は優しく桜雪を抱いた。それから時々、こうして放課後の美術室で肌を合わせる。

今日はすでにその『行為』が終わった後だ。そしていつものように、桜雪は明に『私を、愛してくれる？』と囁くのだった。勿論、明もいつも『もちろん』と答える。

学校内という分かり易い『禁忌』のお陰で、バレてしまった時へ

の恐怖と共に、興奮も増加する。人間とは思議なイキモノだった。互いの体温が溶けて混じり合うように、心も体も、春を迎えた雪のように、溶けて混じってしまえばいい。

体が潤んでいく。ゆつくりと熱を運び、明を導く。

全身を包み、
駆け抜ける快楽とともに。

桜雪は明との時間に、いつも、永遠を思った。

そして、暖かい気持ちと共に、明を誰かへと渡ってしまった時への憎悪を抱く。

[illegible]

2章：吸血鬼：——TYPE？——

僕は教室から下駄箱までの道のりを真っ直ぐ来る。

別に寄る所も無いし、そもそも、下校時刻が近づいて来てる。

下駄箱に付くと、既に部活を終えているのか、何人かの生徒が蔓^は延^びっていた。

ふと、そこには、見慣れた後輩が居た。

その後輩は、僕に気づくと、手を上げ、「あ、先輩ではないか！
今帰りなのか？」と言った。

その後輩こと、薬袋^{みない}和夜^{かずや}は、今時の若者には珍しい、見てる方も気持ちが良い、笑顔をしながら挨拶をしてきた。

僕はたいして興味なさに、「ああ」と返した。

「どうした先輩。微妙に元気が無いぞ？」

「そりゃあ、お前に比べればみんな元気が無いくらいに見えるさ、
薬袋。ってか、常時元気いっぱいなのはお前くらいだろ？」

「む、そうでもないぞ、先輩。ボクだって元気が無い時くらいあるぞ」

「ほう…そうなのか？僕はてつきり、薬袋は常時そんな感じだ
と思ってた」

「先輩失礼だぞ？ボクだって、生理の時は不機嫌になったり、
辛かったりするぞ？」

「悪かった薬袋！謝る！ごめんなさい！！だから女の子が
そう軽々しく、生理なんて言わない！！」

「しかし、先輩。それこそ生理現象なのだから、別に隠したりする
事無いと思うぞ？むしろ、隠す方が恥ずかしいぞ？」

「薬袋…、それはそうだが、しかし、ここでする話でもないと思
うんだが…？」

「だが先輩、この話は先輩が振ったのだぞ？」

「つく…、そう言えばそうだった……。じゃあ、話し変えようぜ

……。そう言えば、薬袋こそ今帰りか？」

「話を変えるといっか、話を戻したな先輩……。ああ。そうだぞ先輩。部活が丁度終わったからな。先輩はどうなのだ？」

「僕か？ 僕は基本的に帰宅部だからな。部活は関係ない」

「そうなのか？ ボクは先輩のことだから、てつきり淒くカッコイイ部活に入ってると思ってたぞ」

「お前の僕への印象派はカッコイイ部活をやる先輩なのか？ 悪いが、僕は僕自身、帰宅部が一番あつてると思ってたぞ」

「む、しかし先輩。落ち込むことは無い。先輩はたとえ帰宅部であろつともカッコイイぞ」

「痛み入り、マチでありがとよ。たとえ、それが見え見えの嘘でもな」

「バレたか」

「その、つてへ、つて顔やめろ！ 可愛いと思つちまつたじゃねえか！！ つてか、本気じゃなかったのか！！」

「いや、先輩がカッコイイと思つているのは本当だぞ？」

「はあ……。いや……。それこそ嘘臭いけどな……」

僕は、はあーと深いため息をつく、薬袋に言った。

「まあいいや……。部活終わったんだろ。だったら一緒に帰ろうぜ」

「先輩、ボクのために待つてくれるのか？ やっぱり先輩は良い人だなっ！」

「よしてくれ、薬袋。ただ単に帰るときが暇だと思つてるだけだ」

「ふむ。謙虚な姿勢も流石だ。ぜひ先輩にお供しようっ！ ……と言いたい所だが、すまない。ちよつと用事があるのだ」

「ん？ 何だ？ 片付けでもあるのか？」

「うむ。ちよつと赤坂先輩からな」

「ああ。赤坂か。なるなる。分かった。アイツを怒らせると怖いからな」

「先輩。赤坂先輩を怒らせた事があるのか？ ボクはそんなおい

それたこと出来やしないぞ。どんな裏テクを使ったのだ？」

「裏テクなんてたいそれた物じゃない……あれは本当に偶然だったんだ。偶然で地雷踏んじまった……」

「ふむ？ まあ、聞かない方が良さそうだから聞かないでおきたい」

「ああ、懸命な判断だ。おっと、それじゃあまたな。事故には気を付けろよ」

「ああ。先輩こそ車には気をつけて」

お互いに手を軽く振って、僕は校舎から外に、薬袋は校舎内にそれぞれ分かれた。

この時は完全に芹沢のことや大河内先生の事なんか頭から消えていた。今日の晩御飯を何にしようかぐらいしか考えていなかった。

だから美術室から強烈な殺意にも似た視線を感じても、ちよつと振り返っただけで、特に何も感じなかった。

2章：吸血鬼：——TYPE？——

結局として、居候死神少女は見た目どころか、精神年齢も低かった。昨日あった事を洗いざらい語ってみた物の、マシロにはさっぱり分からないようで、「ふーん」としか言わなかった。

僕としての的確な指示や説明なぞ求めていたわけでもなく、こんなもんかと思っていた。実際、今日の朝まではそう思っていた。

——そう、朝までは……

+

+

+

次の日。学校に行くと、担任から美術教諭の大河内明が行方不明になったことが伝えられた。

正確には失踪と言うよりは、ただ単に連絡が取れないだけらしいのだが、大河内先生の性質上、遅刻もしないし、連絡もなしに休むことも無いらしいので、大慌てらしい。生徒の中で誰か昨日の下校時間に、大河内先生を見たものがないか、担任はまくし立てた。だが、少なくともウチのクラスにはいない事がわかり、ほっとするやら何やら良く分からない表情をした後、すぐにクラスから出て行ってしまった。すぐに職員会議があるらしい。お陰で1時間目が自習になり、クラスみんなは各自好きなことを始めた。

僕は本でも読もうかと、机の中を漁っていると、愛澄が近づいてきた。

「ねえ、どう言うことだと思う。これ？」

「さあね。愛澄。君がさらったんじゃないかい？ それとも駆け落ちとか？」

僕は軽い冗談を言う。ただ残念ながら愛澄には冗談だと思われなかったらしく、思いつきりひっぱたかれた。

「ばかあ!!」

そう言って走り去った。何処へ行くつもりなのだろうか？ 教師は全員職員室だとしても、不良グループが俳諧してるだろうに。

ふと周りを見ると、クラスみんなが冷ややかな目で僕を見ていた。まあ良い。良くある事だ。僕はそう思って、ようやく探し出した小説を机の上に出して、読み始めた。しばらく僕の事を睨んでいたクラスメイトも、そんな僕に呆れた果てたのか、元のように談話し始めた。

本を読み始めてから数十分。僕は中々愛澄が帰ってこない事にイラついていた。

「あんな軽口いつものことだろ？ 何怒ってんだ」

とぶつぶつと愚痴っていたが、どうしようもない。僕は本を机の中に放り込むと、黙って教室を出た。何人かが僕のこと見ていた気がするが、気にしない。これもいつもの事だ。

とりあえず、行くところの見当がつかないので、職員室へ行ってみる。

職員室は生徒塔の2階にある。そこそこ広く、職員1000人はゆうに入るほどの大きさだ。学校自体が大きく、生徒数は1000人前後いるため、職員も必然的に多くなってしまう。校舎も『生徒塔』と『教科塔』の二つがあり、どちらとも5階建て。県内でも一番大きい学校のはずだ。僕たち2年生は生徒塔の2、3階を占めている。クラスは10クラス近くある。

僕は3階のクラスなので、階段を一つ下り、職員室の前へと行ってみる。案の定誰もいない。職員室に入って、愛澄が来ていないか聞こうと思ったところへ、人の声が聞こえた。

「———そういえば、美術の大河内先生、行方不明なんでしょう？」
行方不明……？ 担任が言ってた事か。

僕は思わず足を止め、声の発信源を探す。どうやら職員室の横の書類室のようだ。コピー機の駆動音もする。

ゆっくり、中にいる人の気づかれないうちに書類室の前へと足を

進める。ドアは開けっ放しのようだ。ついている。壁の影に隠れて、聞き耳を立てた。

「そうなのよ。校長先生が授業の事で電話しても繋がらなくて、家に行ったらもぬけの殻だったらしいのよ」

「へえー。でも、ただ単に出かけてただけじゃないの？」

「でも最近、大河内先生の妖しい噂が立ってたばかりだったから」

「ああ、あの『生徒と怪しい関係になってる』ってやつね」

「そうそう。『あの真面目そうな大河内先生に限って』って他の先生方もおっしゃられてたけど、やっぱり妖しいと私は思うのよ」

「そうねー。私的にはあの優男風の外見的に妖しいとは思ってたけど」

「でた。ミステリマニア」

あはははと談笑が続き、全くの別の話になってしまった。

クソ。対した収穫が無かった。でも、気になる噂があったようだな。

『生徒と妖しい関係になっている』

愛澄の言ってたとおりになったな。ってことは、マジで駆け落ちでもしたか？

となると、さっき愛澄が怒ったのはあいつもそう思ったって事か。でも、ただの冗談だろ？

ここにずっといてもしょうがないので、気づかれないように壁から離れ、教科塔の方へ行ってみる。特にあてがあるわけじゃないし、確信があるわけじゃなかったが、なんとなしに屋上へ行くと、愛澄がぼーっと街を眺めていた。思わずはあとため息が出る。

愛澄が考えてる事が分からないわけじゃない。むしろ敏感に分かる。ゆえにどうしてそこまで思いつめるのかが分からない。

——僕が分かるのはその理由だけで、痛みまで分かるわけじゃないから——

「おい」

僕はなるべく怒鳴り声にならないように、慎重に声を掛けた。
愛澄はビクツとした後、振り向いた。目には涙が溜まっていて、
今にも溢れそうだ。

——否、既に満タンに貯められた涙は溢れていた。僕を見た瞬間
に、あふれ出したのだ。

「どうして……。どうして私がいる事……」

愛澄がかすれた声でそう言う。そんな声で、そんな事を言われて
も困る。気づいたらココに向かっていたのだ。カンと言うよりも、
“初めからそこにいると分かっていた”と言うしかない。

だが、残念ながらそんな“心が通い合ってる恋人”みたいなシ
ュチュエーションは僕は望んでいない。だから

「別に。ただ何となくだよ」
と言った。

だが、愛澄には僕の心の中なんぞ見通しだと言いたげに、クスと
涙をこぼしながらも、笑った。僕はその事に少しだけホツとした。
初め、僕には愛澄が自殺しようとしているのかと思ったためだ。笑
える元気があるなら、どうやらそれは僕の杞憂のようだ。

「こんなところで何をしてるのさ」

僕はなるべく口調を軽めに言う。愛澄の顔を見ないように、視線
を愛澄の首筋へと移す。

「別に……」

愛澄はそっぽを向いて言った。顔は見えない。光は反射する。活
動タイプなのに何故か愛澄は肌の色は陶器のように白かった。その
白い首筋の肌を見て想像する。『この白い肌を傷つけて流れる真っ
赤な鮮血を』。

ゾクツとする。どうして僕は、そんなことを想像しているのだろ
うか。何故、自然にそんな妄想をしているのか。くらくると頭が揺
れる。否、揺れているのは僕の価値観だ。一ヶ月前に出会った死神
の影響かは分らない。だが、どうやら僕は“死の概念”が薄くな

ってしまったようだ。まるで欠けているかのように。まるで死んでいるかのように。まるで壊れてしまったかのように。

“ 欠陥製品 ”

その単語が頭を過ぎる。 “ 死神 ” は存在しているだけでその “ 人間 ” を崩壊させると言う。死神は死を司る神。それはつまり “ 終わりを司る神 ” と言うことだ。存在しているだけで人間の精神を崩壊させる。存在しているだけで人間の “ 何か ” を欠陥させる。

それじゃあ。すぐ側で “ 生きている ” 僕はということなんだろう。

それじゃあ。まるで。僕は。僕は――

「どうしたの？」

気づいたら愛澄は僕の顔を覗いていた。ビックリする。だが、声は出さない。 “ 出せない ” 。

「大丈夫だよ。ちよつと考え事してただけさ」

僕はおどけたように言う。欺瞞だ。偽善者ぶるので僕の右に出るやつはいない。

「それって桜雪と大河内センセのこと？」

大分気を持ち直したようで、気丈な顔をして僕に聞く。ぜんぜん違うのだが、とりあえず話は合わせとおく事にしよう。どうせココに來たのだって、愛澄を探していたのだって、その話のことなんだし。

「ああ。さつき職員室でこんな話を聞いたんだ――」

嗜好きな先生がしゃべっていた、大河内先生のことをすべて吐露する。隠す必要性もなければ気を使う必要もない。正確にしゃべるボイスレコーダーのように。

「――ってな」

すべてを話し終わった後の愛澄は以外に冷静だった。むしろ思っていたとおりね。と愛澄はニヤリと笑う。

「どういうことだ？」

「そういうことよ」

「いや分かんねえよ」

「だからね、大河内センセはそーいうセンサーだったってことよ！！」

愛澄はグツと拳を握って高らかに言う。僕は思わずため息をついた。

本当に大河内先生はそういう人間なのだろうか？　僕がこの学校に入学したときに大河内先生も赴任された。2年間学校である程度であるものの、すごしていた。今年は僕たちのクラスの隣ではあるが（そういえば、芹沢も隣のクラスだったか）、僕たちの学年を担当されたりしている。

本当にそんな噂があれば、クラス担任を任すとは思わない。と言うことは、変な噂が立ち始めたのは最近と言うことか？

大河内先生の本質がそういう人だったのか、何かきっかけになる事柄があったのか……。だが、まったく話じゃない。問題は本当に“駆け落ち”したのか。それとも、何か“事件”に巻き込まれたのか？　今のところは行方不明扱いになるんだろうが、将来的にはどうなるんだろうか？　警察が絡んでれば、芹沢と大河内先生は意外と早く見つかるかもしれない。などと考えを巡らせていたときに、ふと遠くからサイレンが聞こえてきた。

別にサイレンの音が聞こえること自体は珍しくない。人っ子一人いないと田舎じゃないんだ。事故や事件ぐらいはある。ただ気になるのは、そのサイレンが“近づいてくる”と言うことだ。警察・消防・救急どれにしたって向きとしては真逆の方だ。この近くで火災があるとしても、僕たちは今屋上に居て、見渡す限りには煙なんかはまったく見えない。キョロキョロと周りを見渡している今でもサイレンはどんどんどんどん大きくなっていく。まるで警告の鐘音のように。

警鐘音は止むどころか、どんどん大きくなっている。と言うことは、確実にこっちへ向かっていると言うことだった。

そして“ソレ”は現れた。

“ソレ”は数台のパトカーだった。赤色の警鐘を鳴らしながら、パトカーは学校の敷地内に入り、何人かのテレビで見たことのあるようなダークスーツを着た警官が、中央玄関から入っていった。

僕と愛澄は互いに顔を向ける。何もしゃべらない。言葉は必要ない。

僕らは急いで身を翻すと、ダッシュで屋上をでて、階段を数段飛ばしで下りる。職員室のある2階まで降りてくるとターン。職員室前の書類室の影で二人とも身を隠す。こっそりと廊下を見ると、丁度3人ほどの警官が職員室へ入っていくところだった。扉は開けっ放しなので、職員室内での会話は筒抜けだった。何より、感情が高ぶっているのか、大声で叫んでいる先生もいるので、あれなのだが警察捜査一課。

彼らはそう名乗った。それは普通の事件を担当する部署じゃない。少なくとも、行方不明者を探す専門員ひとたちではないはずだ。

捜査一課。担当する事件は――

「本日未明。この学校の■■■である■■■が死体で発見されました」

――殺人事件。

僕は自分の呼吸が止まるのを感じた。後ろにいる愛澄の息を呑む音も感じる。

どういうことだ？

■■■が：死んだだと？

頭の中が真っ白になる。まただ。また僕の周りで誰かが死んだ。嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ！ もう見たくない。もう聞きたくない。もう知りたくない！ 骨の碎ける音。肉が潰れる音。矮軀わいくの拉ひっこげる音。悲鳴。怒号。歡喜、狂気。頭で走馬灯のように回る言葉、音。映像

はいつも決まって“アイツ”だ。僕はいつまでこの“映像”に囚われ続けるのだろう。思い出したいくない。モノトーンで再生され続けるのは雪が降り続けるあの日。止めてくれ。あれは確か――。もう止めてくれ。アレハタシカ…タシカ――

「どういうことなの……？」

愛澄は呆然と呟く。愕然と。啞然と。どこか破綻したように。

「どうして桜雪が死体で見つかったの？」

2章：吸血鬼：——TYPE？——

時刻13時丁度。

僕たち生徒は午後の授業前に下校することになった。それどころか、1週間は学校閉鎖になるようだった。いきなりなことで生徒どころか先生も驚いていたが、そこはそこ。これはこれ。きっちりしつかりと1週間分の課題を化せられた。しかしプリントや問題集などももちろんあるわけがなく、当たり前のように自習だった。だが、生徒はそれだけで済むから楽なのかもしれない。先生は緊急会議や警察の事情聴取などでてんでこ舞いだろう。

警察の事情聴取。

それは先生方だけではなかった。愛澄も、被害者の芹沢桜雪の近しい友人として、事情聴取を受けなければいけない様だった。愛澄は見ていて痛々しいぐらいに衰弱し、呆然し、また愕然としていた。

不審死。

芹沢桜雪は普通ではありえない死に方で死んでいたのだ。

具体的に言くと“全身の血液を抜き取られていた”。

出血多量死。それが芹沢の死因だった。まるで。そう、まるで——

「吸血鬼に襲われたみたいだ……」

ポツリと呟いてみる。僕は学校から真っ直ぐ家に帰らずに、制服のまま町の中をうろついていた。どうせ緊急会議やらなにやらで教員は学校なのだし、怒られる事はない。そのせいかやけに制服を着た人たちが多い。注意する人がいないのだから当たり前かなと思う。家に帰ってもどうせ引きこもり死神少女だけが待っているのだから、何とも言えずにただただ繁華街をうろついているのだった。

ただほつつき歩いていてもしょうがないのだが、やる事もないし、行く所はもつとない。友人と遊んでいる気分でもない。まあ、友人

なんてそんなにいないけど。

ふむ。暇ならあそこにも行ってみるか。特に深く考えず、頭の中に浮かんだある『場所』へと向かう事にした。

学校を北側に位置して、南へ進む。昨日に立ち寄った巨大チエーンの古本屋、スーパーを通り過ぎる。そのまま下り、ある交差点を東側へ曲がる。ちょっと狭い小通りだが、間違っではない。この先にあるいい感じに寂れたビルが目的だからだ。

交差点を曲がってから3分ぐらい歩くと、廃れた感が漂うビルの前につく。正面玄関の横には大きな看板が立っている。中に電灯が入ってるタイプの看板で、中の電灯がジジジと唸り、ついたり消えたりする。場所が場所。ここら一帯は薄暗いため、中の電灯がついたり消えたりすると看板の文字が非常に見えづらい。相変わらずの様子で僕ははあとため息をついた。

意を決して建物の中に入る。看板にかかられている『滝月病院』へと。

建物の中に入ると、一気に空気がよんだ気がした。否、この建物の中がもともと淀んでいるのだ。建物自体が、僕を『異物』として排除しているような感覚にとられる。相変わらずココはなれない。入ってすぐ隣にあるスリッパ立てがあるのだが、僕は無視して土足のまま中へと入る。スリッパ立ての先にはまたガラス扉があり、そのガラス扉のガラスはどちらも割れている。鍵もかかっていない。割れているガラスに気をつけながら扉を開ける。先に進むと横に受付があるのだが、勿論誰もいない。書類が地面に散らばっている。一枚拾い上げ、書面に目を走らせる。日本語と外国語が書かれている。外国語の方は、文脈から察するにドイツ語か？

特に興味がそそられる内容がなかったため、コピー用紙をピツと指先で捨てる。ヒラヒラと中を舞い、スツと地面に滑り込んだ。そしてしばしの静寂。不気味さが漂う。

奥からガタンと何かの音がする。ふむと考え、地面に散らばっている書類を踏まないようにしながら、奥へと進んだ。奥にはたくさ

んの扉がある。ココがちゃんと機能してた頃、外来患者用の部屋として使われていただろう。今では全部の扉は鍵がかかっていた。確かめるでもない。何故なら昔“実際に触って、回してみた”からだ。なので、その扉群を素通りし、一番奥へ。一番奥の扉は通り過ぎた扉とは違って、プラスチックではなく、高級感の漂う木の扉だった。

僕はふうと息を整え、覚悟を決めて、ドアノブをつかむ。一瞬のためらい。だが、次の瞬間に思いっきり扉を開けた。ぶわっと暖かい空気に包まれる。暖かい空気は僕の頬を撫で、ひんやりとした廊下へと流れていった。

「早く閉めろ」

僕は言われたとおりに手を後ろに回し、ボタンと扉を閉める。

「よし」

僕は正面を見る。そこには高級そうなアンティーク物のデスクに腰をかける30代の女性がいた。赤いタンクトップ、同様に赤いミニスカートを着用し、その上から純白の白衣をボタンをかけずに肩にかけている。ミニスカートにもかかわらず、尊大な態度で足を組んでいる。相変わらず寒そうな格好だ。まあ、まだ10月だし、暑いといえは暑いしな。

何故椅子ではなくデスクに腰をかけているのか、何故こんな廃墟に人がいるのか。もろもろと不平不満があるだろうが、この人は“こういう人なのだ”としか言えない。手にある少年漫画が非現実さを際立てる。

この目の前の変人。この人こそ、ココがまだ『病院』として機能していたときの医師兼院長『滝月璃緒』たきつきりお本人なのである。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………なんでお前は黙ってるんだ？」

「は？」

リオ先生は漫画に完全にトリップしていたはずなのに、ふと僕の方に目を向け、怪訝そうに眉をひそめた。

「なんで…とは？」

「お前はココに何か話しに来たのではないのか？」

「いえ。ただの暇つぶしですが？」

僕は決して広くない院長室のある一角を見る。そこには少年青年少女一切合財統一性なく、まるでとにかく目に付くものを引っ掻き集めたと感じた感じの、漫画がたくさん集められている。本棚なんて気の効く物はココにはなく、シリーズ物の漫画が縦にビルディングを形成している。

「暇なんて漫画でも見せてもらおうかなーと思って」

「ここは漫画喫茶ではないぞ？」

「大して変わらないじゃないですか」

「まあな」

そしてリオ先生は手元の漫画に再び夢中になった。何度も読み返しているはずなのに、なぜ何回も読み返してもあそこまで夢中になれるんだろうか？

僕は漫画のビル群に近づき、適当なコミックビルの上の一冊を手取る。20巻近く発売されている人気少年漫画だった。ふむ。僕も興味があったし、これにするか。

数分か数時間か、あるいはたった数秒だったかも知れない。とにかくしばらく時間がたった後、ふとリオ先生が「お前、何か楽しい事件に巻き込まれているようだね」とボソツと言った。その声はとても小さく、静寂な一時だったとは言え、非常に聞き取りずらかった。

「……はて、何の事です？」

僕はとりあえずとぼけることにした。あはは、この主人公熱血で好感持てるな。嘘だけど。

「とぼけなくてもいいじゃないか。俺にはね、友人がいるんだよ」

「はあ、友人ですか……」

そう言えばリオ先生の一人称は『俺』だったな、とかどうでも良い事を頭によぎらせつつ、友人ぐらい誰でもいるだろうと思った。いや、僕やこの人に限ってはそうでもないか。そういう意味では驚きに値するのもかもしれない。友人なんてくだらないと思ってるからな。僕もリオ先生も。

「ああ。幼馴染というやつか。やつは刑事をしていてね。小さい頃には殺し屋になりたいと卒業論文に書いていた」

「随分エキセントリックなご友人ですね」

絶対に知り合いたくない。この人は絶対に性悪だろう。突っ込みどころが多すぎて、あえて放置するしかない。

「あいつは不条理な悪が許せないタチだね。小学生の時点で警察では処理しきれない悪があることを理解してたのさ。それこそゴルゴ13みたいなやつになりたいと言ってたよ。まあ、小学生でそんなこと考えてるのあいつだけだったしさ、みんなアイツを避けてたよ。お前も分かるだろ？ 人から避けられる気持ち」

「ええ」

それはもう、おなかいっぱいに分かる。思い出したくもない。

「でな、そいつに近寄ってたのは俺だけだったのさ」

「なるほど」

この会話で分かった事は、そのご友人の奇人さとリオ先生の変人さだけだ。

「それでその幼馴染がこれは困ったと泣きついてきたもんだからな。昔の患者——とくに今では10代20代となっているやつの力テよこせとか言ってきた」

「泣きついてきたんですか？」

「問題はそこではない」

そんなことは僕も分かっている。ちょっとしたアメリカンジョークじゃないか。そんなこと微塵も思っていないけど。そもそも僕はアメリカ人じゃないしな。だけど、日本人かどうか也正直怪しいと思

っている。

「問題はな——その渡したカルテの方さ。出頭願いが出たカルテは『あの事件の被害者』のカルテだったのさ」

「……………へえー」

たぶん、普通に反応できたと思う。これくらいで動揺してどうする。こんな事今までもあつたし、これからもある。

「ふうん。ずいぶん普通の反応じゃないか」

リオ先生は皮肉げにやりと笑う。どうやら僕は反応に失敗してしまつたらしい。

「……………あれは昔の話ですよ」

「ああそうだな。だがな、“犯罪の被害者”に成つたものは——いや、この言い方は悪いか。言い直そう。“犯罪に巻き込まれた者”は多かれ少なかれ、“その犯罪の影響”を受けるのさ。特に『あの事件』は極悪凶悪残酷残酷——否、そんな“簡単な言葉”で言い表せないような『事件』だ。その分“被害者”の受けた“影響力”はすさまじいものだ。実際、『何人』かは軽犯罪であるが、『開花』している。だからこそ“今回の事件の加害者”となる可能性も非常に高いのさ。お前だつて知ってるだろう？ 『ストックホルム症候群』」

「『ストックホルム症候群』とはちよつと違う気がしますけどね」

「『ストックホルム症候群』とは、誘拐されたり人質にされたりした犯罪被害者が陥る心理状態のことだ。簡単に言つと、犯罪被害者が、犯人と一時的に時間や場所を共有することによって、過度の同情さらには好意等の特別な依存感情を抱くことをいう。これはスウェーデンの首都、ストックホルムで実際に起こつた銀行強盗事件が元になつている。」

「詳しいねえ」

にやにやとリオ先生が笑う。少し腹がたつたので、「先生が教えてくれたんじゃないですか。知りたくもないのに」と言つた。

「へえー。知りたくなかつたんだ？」

チャシャ猫のようにぐぐっと口元を上げる。にやにやと言う形容を越えた笑い方だった。

僕は黙った。じつとリオ先生の目を見る。しばしのにらみ合い。そして数秒たった後、「ま、いいけどね。どーでも」とおどけた調子で目をそらした。僕が競り勝ったわけではない。本当にリオ先生はどうでも言いと感じてるから、この争いを避けたのだ。

「まあ、今回の件に関しては、俺はこれ以上話はしないよ——ああ、そうそう。さっきの話に戻るけど、その幼馴染のありがたい警官様が、お前に会いたいつてさ」

「それはそれは、ありがた過ぎて涙が出てきますね」

マジで泣きそう。アレ？ 僕って警官じきじきが出向くようなことしたっけ？

「それはあれだ。『あの事件』の最大の被害者兼一番面白そうな奴だからさ——風の噂では、その事件以外でも最近面白い事に巻き込まれてるらしいしね」

「なんでそんなことまで知ってるんですか。アレですか？ 僕に盗聴器でも仕掛けてます？」

「ああ、盗聴器つてあれだろ？ 携帯電話の一步通行バージョンつてことだろ？」

「えらくシークレットな携帯電話ですね」

「“冗談さ”」

にやりとリオ先生は笑う。してやったりと言った感じで。やられた。お株を取られてしまった以上、ここに長居も出来ない。見ていた漫画を閉じ、漫画ビルの上に戻そうとしたが、置いたら絶対に崩れるなと思い直し、横に投げ捨てた。

「今日は帰ります」

「そうかい」

リオ先生はすでに漫画に全神経を集中させていた。僕は特に気にせず、ひらひらと手を波打たせながら高級扉を開け、部屋を出る。扉を閉めたとき、ドサツと本がたくさん崩れた音がした。

ガラスの割れた正面玄関から外に出て、完全に人のいる場所として機能しなくなった病院を振り返りながら、あ。と思う。そうだ。今度ココに来たときにでも聞いてみよう。

『先生はどうして医者を辞めたんですか？』って。

2章：吸血鬼：——TYPE？——

時刻は夜9時。良心的には電話を避けるだろう時間帯。ボロアパートに今では骨董品並みに珍しい回転式の黒電話が鳴り響いた。マシロは耳を押さえてうーうーと唸っている。確かに今の人はこの黒電話の雄叫びをまじかで聞いてると、鼓膜が破れるかと思うだろう。僕はなれているので、特に何も思わず、黒電話の受話器を取った。

「もしもし、■さんのお宅でしょうか？」

ざらりと耳の中を舌で舐められたような悪寒が走る。相変わらず名前を呼ばれる感覚に慣れない。電話越しで聞こえる声は女性のようだ。はて？ 女性から電話をかけられる覚えはなかったはずだが？

「もしもし？ もーしもーし？」

返事がない事に不思議をもったようで、何回も「もしもし」を繰り返していた。僕は慌てて「はい、そうですが何か？」と返した。

「ああ良かった。では貴方が噂の『ふーくん』なのですね」

「は？ 今何と言いました？」

「良かった良かった」

「いやいや、なに自己満足してるんですか？ どこで『ふーくん』と言う代名詞を聞いたんですか？」

「貴方も大好きな『璃緒先生』ですよ」

ああ、なるほど。この人が……

「リオ先生の幼馴染の警官さんですね。小学生のときの将来の夢がゴルゴ13の」

「正確には警官ではなく刑事ですけどね。うふふ。璃緒ったらそこまで貴方に話してるんですね」

しばらくうふふと言う声が続く。

「貴方は璃緒に大分気に入られているようですね」

「むしろ逆だと僕は考えているんですがね」

なんせ会ったびに嫌な顔されるもんな。

「いえいえ、それは照れ隠しですよ。いわばそれが萌えなんですけどね」

「はあ……」

「なんだ。萌えって……」

「あら、駄目ですよ。子供なら漫画とかアニメは見てない」と

「中身はもう子供じゃないですけどね」

「精神はすでに老衰しきってる。あー、早く死にてー」。

「そうですか。それでは貴方が自殺する前に言わなければいけないことがあるんで言いますね。貴方、『芹沢桜雪』を殺しましたか？」

「——ッ」

随分直球だなこのヤロウ。いや、アマ。リオ先生から疑われてるみたいな事言われたけど、まさかココまで露骨に聞いてくるとは思わなかった。

「随分直球ですね。野球なら目をつぶってでも余裕で打てますよ？」

「その代わりファールボールですけどね」

「うふふと上品に笑う刑事。」

「はぐらかすのは無しですよ？ これでも私は忙しい身分なので」

「それは大変ですね。それなら僕にかまわず今すぐにでも電話切ってくださいですよ？」

「いえいえ、それには及びません。私は警察という組織内のしがない歯車のひとつですからね。上層部の人間の決定事項には逆らえないのですよ——というわけで、しばらく私との会話を楽しんでください」

「ぜんぜん楽しめないですけどね」

「参ったな。これじゃ鏡に向かってしゃべってるもんだ。暖簾に腕押し。まったくもって手応えがない。」

「あらあら、これは手厳しい」

「うふふからくすくすに笑いが変わった。若干そちら側が有利と感じたのだろう。」

「貴方とは直々にお会いして話し合った方がよろしそうですね。ど

うです？ 私とご一緒に浮気なんかでも？」

「残念ながら元々本妻自体がいません」

「あらあら、では学校でご一緒にいらつしやった可愛いお姫様は一体なんなんでしょうね？」

「……………」

この人、あの時学校にいたのか？ いや、そう決め付けるのは早計か？ 僕と一緒に女の子がいたから、誰かが記憶していただけかもしれない。いやいや、そもそも僕は“誰にも見つからないように” 気をつけていたんだ。断言しよう。確かに周りには誰もいなかった。と言う事は――

「刑事さん。貴方は職員室に乗り込んだ警官の中の一人なんですか？」

「その答え合わせは実際に会ってからということですが、どうでしょうか？」

「……………」

畏…… かな？ でも、これ以上はどうしようもないか……？ どうせ僕の人生はこんなものだ。過去も今も。なら未来も同じでないといけないよな。全身全霊で冗談だけど。

「……………いいでしょう。場所は？」

「暗いところで」

「分かりました」

僕は黒電話の受話器を戻す。チンという音になる。数秒してから黒電話がまたなり始めた。今度はワンコールで受話器をとる。

「市街の一番大きいデパートの中央に待ち合わせスポットとして有名な小狭い広場があります。そこに今度の土曜――と言っても明日ですね。明日の昼12時に」

「了解です。これにて御免」

さつきとまったく同じ動作で受話器を戻す。やれやれ、僕は不思議な事に巻き込まれるような体質にでもなったのだろうか？ くりりと後ろを向くとマシロがにこにこしながら首をかしげていた。さ

て、マシロは連れて行くべきか否か。それが今の最大の問題だった。

2章：吸血鬼：——TYPE？——

土曜日。天気、超快晴。ただし午後からのち雨。

今日は刑事さんとの面会の日だった。別にほっぽといて遊びにでも行ってもいいのだが、なんだかそれは憚^{はば}れた。

マシロは結局のところつれては来なかった。霊体化すれば刑事さんどころか僕にすら存在はキャッチできない。それならば危機回避対策のためこつそりとつれてきてもよかったのだが、昨日の刑事さんの会話の端々から僕の愉快な過去話まで掘り下げて話さなくてはいけないかもしれない。別に面白くもなんともない話だし、愉快に不愉快な話を彼女に聞かれるのはどうしても避けたかった。昔はどうであれ、彼女には今の僕を見てほしい。いや、もちろん嘘だけだね？

待ち合わせ時間は12時だが、何があるかはわからない。念のためを含めて、10時にはボロアパートを出た。マシロに勘ぐられたのだが（昨日家に帰ってきてからすぐに休みのことを言ってしまった。不覚だ）、適当に理由をでっち上げて一方的に家を出てきた。後でうまいご飯でも作ってやればぶーぶー言わんだろ。

そんな訳でデパートに着いたのは10時半だった。約束の時間よりも1時間半早い。さて、どうしようか。

このデパートには始めて入る。いつもは学校の下校途中のという限定条件のため、アパートと学校を結んだ一直線上の途中にあるスーパーを利用するから、デパート自体に入る必要もないからだ。僕は基本的に必要なもの意外は、あんまり買わない。しいて言うなら本ぐらいか。小説と漫画ぐらいしか読まないけど。人がつらつらと書いているエッセイなんか読む気にもなれない。人それぞれがそれぞれの考え方があってもいいと思うが、それを他人に自慢げに説明するのはどうしても生理的に気に食わない。説教をたれるのは老後にでもとっておいてくれ。『私はこれで人生を成功しました』と

か、激しくどうでもいい。

どうでもいいことをデパートの正面玄関で考えていると、人々が怪訝そうな顔をして横を通っていく。ふむ。だいぶ邪魔になっているみたいだ。さっさと中にでも入ろうと歩を進もうとしたとき、ぐいぐいと上着のすそを引っ張られる感触がした。

……。はて、僕は最近子供の出会いの運勢でも高いのだろうか？ 僕の後ろで小学生ぐらいの女の子が泣き顔で僕の上着をつかんでいた。格好は水色の簡素なワンピースを着て、靴はちょっとしたおしゃれなのだろうか？ 雑誌にでも載っているようなサンダルを履いている。今日は暑かったし、子供は風の子ってよく言うしな。ちなみに僕の妹は風邪の子だった。

僕はこの子をどうしようかと考えを頭の中で一回り巡回する。人の行動を決定するのは二つの手段。一つは甘やかす。もう一つは厳しくする。いわゆる『アメとムチ』だ。僕の似合っている行動といえは……？

僕は少女を無視して先に歩を進めた。一度振り返っている以上、無視はできないだろうって？ 甘い甘い。僕は人としての“欠陥製品”だ。普通の人ができるようなことを僕がすると思うか？ なんて天邪鬼的なことを自虐しつつ考える。迷子の名も知らぬ少女よ。恨むんなら僕に助けを請うた自分を恨めふははーとダークヒーロー的なことを心の中でつぶやく。僕は偽善者ですらないのだ。まったく、始末が置けないな。

デパート内に入ってきたきよきよと周りを見渡す。ふむ。今日は朝ごはんも食べてないし、先に軽く軽食でも食べておこうかな。

「ということで、レストラン街はどこだろう……」

「レストランならいちばん上だよ？」

ぱつと振り向くとさっきの少女がにこにこしながら後ろに立っていた。

「……なんているの？」

僕はなるべく紳士的に問いかける。あれ？ 僕この子について来

いなんて言ってないよね？

「おにいちやんがわたしと同じ“おめめ”をしてたからー」

朗らかな笑顔でよくわからないことを言われた。同じ目をしている？ おいおい、冗談だろ？ こんな天真爛漫な女の子と僕のようなただ生命活動をだらだらと続けているだけの“欠陥製品”が？

「うん。だつておにいちやんも私も“魚がくさつたようなおめめ”してるからー」

「……………この子は…いったいなんだ？ 考えるだけ無駄なのか？ だけど――」

「……………君はなんていう名前なんだ？」

気づいたら僕は彼女に声をかけていた。僕でもよくわからない。でも、突発的な衝動を駆られたのだ。そういう意味では、僕も深層心理の中で彼女を“同類”と感じているのだろうか？

「わたしは『みなづききょうか』ていうのーっ！！」

少女は僕の心の中など知りえていないかのように、朗らかに微笑んだ。

+

「ふーん、『みなづききょうか』って、『水月鏡花』って書くんだ」

時は鏡花ちゃんと衝撃的な出会いをしてから30分後。午前11時。場所は自動販売機が乱雑しているエントランス。家族連れが黒い炭酸水やら緑色の日本になじみの深い苦い飲み物とか飲んでいる。そんな中で、僕と鏡花ちゃんは何個もあるベンチの一つを陣取っていた。

「うん。なんかねー、『美しいものをたとえるよじじゅくご』からとってるんだってー」

「ああ。『鏡花水月』のことか。ふーん、ずいぶんしやれた趣味のご両親だね」

「『きょうかすいげつ』てー？」

「『鏡に映る花や水面に写る月のように、絶対に触れることのできない美しいもの』って意味だよ」

正直自分でもこれはあっているかわからない。確かこんな意味だったような気がするだけだ。

「うーん、意味がむずかしくてよくわからない」

「だろうね」

僕だって意味が通じるとは思っていなかったさ。

「でも、それがとってもいい意味だってことはわかるよー」

鏡花ちゃんは太陽のような笑顔で言った。

…まったく、この子はよく笑う。僕が子供のころなんか、一度たりとも笑顔なんてしたことはなかった。今もその不敗記録は続行中だ。

「…うん？ おにいちやんどうしたの？」

「なんでもないよ。僕は鏡花ちゃんと同じころにはこんなに笑ったことはなかったなあーとかまったく思っていないよ」

「あははー。なにそれー」

あはははと邪気のない笑いをする。子供だ。まごうことなきほど、子供だ。精神も体も子供だ。だが――

「わたしはねー。わらうことしかできないだけなんだよー」

と鏡花ちゃんは笑いながらいった。その台詞は笑顔とことん似合わない。

……今時の子供はみんなこうなのか？ 難しい言葉を言って煙に巻いている――わけでもなさそうだしなあ。まったく、わけが分からない。

「なにむつかしいかおしてんのー？」

と鏡花ちゃんが僕の顔をのぞいてくる。「なんでもないさ」と僕は答えた。

さて、のんびりとジュースを飲みながら話しているが、時間があと1時間もない。まさか刑事さんとの対峙にこの子を連れて行くわ

けも行かないしな。

「鏡花ちゃん、迷子だったよね？ お母さんと来たの？」

子供には優しい偽善者。あれ？ 30分前と間逆のようなこと言ってる気が。

「ううん。今日はきんじょのおねえさんときたのー」

「近所のお姉さん？」

ふーん。子供にやさしいお姉さんなんだね。これがお兄さんだったらロリコン疑惑が浮上する。いや、もちろん冗談だけどね？

「うん。ああおねえちゃんっていうんだよー」

「ふーん……」

はて、どこかで聞いたような名前だ。いや、『ああこ』なんて名前、それほど腐るほどいるしな。

「じゃあ、その『ああこ』お姉ちゃんを探さなきゃ」

「んー、だいじょうぶだよ。ほら」

鏡花ちゃんはふと前方を指差す。そこには走ってくる人影が見えた。物凄いスピードで人影がこっちに来る。漫画で表すと、背景に『ドドドド』と迫力ある字で書かれていることだろう。人間技とは思えない。ちなみに『技』を『業』って書くとなんかカッコいいよね。『罪』とかそれに近い意味だからさらにぴったりだ。こんな事言ったら瞬殺されるけど。

「——っていうか『伽藍』先輩じゃん!!」

その走ってくる人影は知り合いだった。しかもめちゃくちゃ会いたくもなかった人だ。

「おにいちゃん。おねえちゃんとしりあいさんなの？」

鏡花ちゃんが不思議そうに首をひねって僕を見る。僕だって首をひねりたい。僕の運の悪さに思いつきり首をひねりたい。

「鏡花ちゃん!! どこに行ってたの!？」

その人影こと伽藍先輩が鏡花ちゃんを捕まえて頬ずりしている。その光景を見て僕はため息をついた。このはちゃけた人が伽藍青子とろあいあおこという、僕の2年上の先輩なのだ。

伽藍青子。僕らが通う高校の3年生。大の子供好きで近所の保育所や託児所にボランティアで遊びに行っているらしい。性格・行動ともにちゃけた人で、1年の僕ですら知っている。まあ、それを抜いても僕と伽藍先輩は知り合いということもあるのだが。

「もうもうもうもう！！ どこ行つたの？ あれほどアタシから離れちゃだめつて行つたのに！ いい？ この世にはね鏡花ちゃんか■（ピー）とか。鏡花ちゃんは可愛いんだから特に狙われやすいんだから！！ っていうかももうアタシがお持ち帰りしたい！！」

「お、おねえちゃん！？ くるしいー！！ といつかなにいつてるかわかんないよー！！」

伽藍先輩は鏡花ちゃんの頬を皮膚が剥けるぐらいのスピードで頬ずりをしている。ああ、あれ絶対血い出てるぞ。

「お、おにいちちゃん！！ げんじつとうひしてないでたーすーけーてー！！」

「おお、現実逃避なんて難しい言葉よく知ってるね」

「感心してるばあいじゃなあいー！！」

わりかし大変な事になつていたので、僕は「とりあえず落ち着いてください伽藍先輩」といった。

伽藍先輩はようやく僕の方に顔を向け、「ああ、いたの？」とかなりどうでもよさそうな表情をした。この人は可愛いもの以外は興味がないのだ。ちなみに“もの”は“者”と“物”とどちらとも取れたりするあたりなんだか貪欲さがにじみ出ている。

「伽藍先輩は相変わらずですね。あれですか？ 鏡花ちゃんもどつかで拉致でもしてきたんですか？」

「そもそも何でアンタがこの子と一緒にいるのよ」

ジト目で見られた。困る。僕だつて聞きたい。神様に聞きたい。神様…あなたは馬鹿ですか？

困惑というか機能停止をしていた僕に泥船——いやいや違った。

助け舟を出すように、鏡花ちゃんが「まいごちゃんになっていたわたしを助けてくれたのー」と伽藍先輩の腕の中で苦しそうに言った。いい加減離してあげたらどうですか先輩？

そんな僕の視線に気づいたのかは分らないが、伽藍先輩は鏡花ちゃんを腕の中から離してあげた。後ろではあはあ息を整えている鏡花ちゃんの一瞥した後、僕に対峙して言った。

「てゆうーか、アンタ迷子とか助けるような特称な性格してたっけ？ アタシの麗しい脳みそが記憶しているあんたの性格は、迷子を見つけたら迷子センターに連れて行く振りして男子便所に連れて行くような性格だったはずだけど」

「それはただの変態です」

「シスコンの時点で変態よ」

軽蔑された目で見られた。そう、この人は僕と同じ中学校出身者で、10年前の『あの事件』も知っている。もちろん、僕の妹とも面識があった。—— あったと形容するたびに僕は胸を締め付けられるような気分になるけど。

「シスコンの何が悪いんです？ シスコンシスコンと蔑みますが、家族と仲良くすることがそんなにいけないことなんですか？」

「アンタの場合度が過ぎんのよ」

「——とは？」

「死んだ妹に幻想を抱きつつどうでもよさそうに日々を生きてる。そのくせに常に妹妹って、アンタはなんなんだ？」

ずいぶん酷い扱いだった。まあいい。この人も人の話を聞かないどころか聞いた上であえて無視するようなタイプだし。僕自身その評価にはうなづくしかない。

「……………。別に。気にしないでください。そういう人間なんです」

「…………ふん」

吐き捨てるように鼻を鳴らす。

「まあいいわ。アタシも別に喧嘩する為にココにきたわけじゃない

いし」

そう言つて伽藍先輩は鏡花ちゃんを抱き寄せた。ああ、そういうば鏡花ちゃんと伽藍先輩は近所同士つて言つてたな。

「鏡花ちゃんとお買い物ですね」

「うん。そうだよー」

伽藍先輩ではなく、ほにやほにやとした笑顔で鏡花ちゃんが言う。

「ふうーん……。ま、それなら僕はそろそろおいとましようかな」

僕はそういつて飲みきつたお茶のアルミ缶を握りつぶした。缶を捨てようと立ち上がると鏡花ちゃんが僕の方を見上げてきた。

「えー、おにいちちゃんもいつちゃうのー？」

後ろでやけにハイテンションで万歳を繰り返している伽藍先輩を僕は無視し、缶を捨てるため自動販売機の横にあるゴミ箱に近づく。鏡花ちゃんはちょこちょこ僕の後をついてきた。

「ああこおねえちゃんなら、むししていいんだよ？」

「僕は鼻っから伽藍先輩の相手はしてないさ」

鏡花ちゃんの飲み終わったアルミ缶を取り上げつつ答える。鏡花ちゃんは小さな声であつと言つたが、僕は気にせずに僕の飲み終わったお茶の缶と一緒に、鏡花ちゃんの空き缶も捨てる。その後振り返り、

「僕はもともと予定があつてね。これからはその予定消化のために人に会わないといけないんだ。鏡花ちゃんは連れて行けないよ」と言つた。鏡花ちゃんはずつむき、しぶしぶと言つた感じで分かつたとうなづいた。うん。何気に伽藍先輩を無視したセリフに気づかないほどシヨックだったんだろうなあ（他人事）。

「うん、いい子だ。——それじゃあ先輩。後お願いしますね」

「お願いも何も、アタシの本日のご予定通りさ。アンタに言われるまでもないね」

「……おっしゃるとおりで」

僕は肩をすくめつつ苦笑いする。そしてそのままエントランスを後にする。後ろでは鏡花ちゃんがちっこい体をめいいっぱい使いな

がら手を振っていた。その光景を見ながら思う。そうか。排他的な僕が鏡花ちゃんにあそこまで引かれた理由。天真爛漫な笑顔。無邪気な発言。舌足らずなしゃべり方。そうか――

――彼女は僕の妹にそっくりだったんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7931/>

僕と死神

2010年11月8日20時01分発行